

サルトルにおける『糞便論的記述』：その(1) (試論)

著者	川神 傅弘
雑誌名	仏語仏文学
巻	7
ページ	45-68
発行年	1974-05-30
その他のタイトル	Scatologie et Sartre
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017565

サルトルにおける『糞便論的記述』

— その(1) — (試論)

川 神 傳 弘

〈 序 〉

サルトルの小説作品群を roman à thèse (問題小説) であると断定することに反対者の多くあるとは思われない。つまり、こういうことだ。“小説を書くとは、人間生活の描写のなかで、公約数になりえぬものを極限までおしすすめることにほかならない。”¹⁾ とする Walter Benjamin の定義を借用して、仮りに一般的な小説創作態度であるとすれば、そのフィルターはサルトルのそれとは重ならないようだ。というのは、とりわけ人間に興味を抱いているこの作家(?)は、自らの世界内人間把握をいつも一旦 philosophie の形で把え、いわば公約数を求めておいた上で、改めてその公約数を小説という形の中で素数に還元し、その素数の一単位一単位を肉体化した人間存在として作為世界の中にばらまき、再び公約数として別の形にまとめ上げる操作の場として、結果的には小説を利用しているように思われるからだ。従って、彼の公約数を求めるという創作の意図は、Maurice Blanchot の指摘するようにいつも明白であり、²⁾ thèse≡thème

1) Walter Benjamin: 著作集 7. 文学の危機。Werke Band 7. All rights reserved by Suhrkamp Verlag KG., Frankfurt 高木久雄, 佐藤康彦訳 P. 166

2) 焰の文学, モーリス・ブランショ, 現代文芸評論叢書, 紀伊国屋書店, 重信常喜訳 P. 131 “テーマはそれが形成される論理的な場所では生き生きとしているが現実的な事物の反映のなかに移植されると死んだ思考となる。この種の小説では人物に生命がないといって非難されるが、生命がないのは観念である。つまり観念はもはや自分自身にしか似ず, 自分自身の意味しか持っていない。作為の世界は観念をちっともかくそうとしない。そこでは観念がその起源における裸の状態よりもよく見え, また非常によく見えるから, われわれに提供すべき秘密を少しも持っていない。”

が成立しうると思われるサルトルの小説の世界は、発生する事件に対する作中人物の態度、自己の技法および作中人物に対する作者の姿勢等をすべてその小説の構成要素たらしめようとしたアンドレ・ジッドの「純粋小説」の延長を目指したものでありながらも、かなり相異したものとして映る。ここに云う公約数が *thèse*, *thème* の謂であることはいうまでもない。

ところで、問題小説（テーマ小説）の危機乃至欠陥として殊にサルトルに就いて、テーマが明らかにされて曖昧さが欠落し、意図の極端な露呈が影の部分の不在を生みだしている、として、Roland Barthes はその文章表現への濃厚な影響をネガティブな形で扱っている。つまり、秘密の部分のない、素裸の観念の露呈に止どまる *écriture* もやはり小説の危機を招くであろうということのようだ。平明に解釈すれば、小説が言語芸術であることを宿命づけられている限りは、*poésie* の内包が義務としてあるにも拘わらず、サルトルの *écriture* からはそれが漂よって来ないということだろうか。ちなみに Pierre Guiraud 氏もその *LA STYLISTIQUE* の中で、“サルトルのばあい、ぶよぶよの、べたつく、ねぼついたといった語はいつもその意義をのり越えて、存在の体験である一哲学を表明しようとする。”³⁾ と述べ、サルトルの文体は Roland Barthes の目指す「白い文章体」からはずれるものであることを指摘している。こうした *style* や *écriture poétique* については実存主義文学のもう一人の双壁、カミュに軍配の上がりそうな気配である。それはサルトル自身の認むるところでもある。⁴⁾ 思うに、先の Blanchot は哲学者による小説創作に深い疑問を抱いたし、⁵⁾ 戦後日本にサルトルが紹介された当時において、我が国文壇は彼の作品を際物扱いにしたこともあったが、それらの事態を呼び起す一因がサルトルの価値意識の旺盛な *écriture* にもあったのではないか。

3) Pierre Guiraud: *La Stylistique*. (Collection. *Que sais-je?* N°646) 佐藤信夫訳, P. 117

4) *Situation*, I. Maurice Blanchot を評した『アミナダブ』の章を参照。

5) 焔の文学。モーリス・ブランショ。Ibid., P. 136

サルトルにあっては諸氏の指摘の如く彼の公約数が現象学を通過した存在論として露骨であるかもしれない。サルトル的実存主義のいわば原点をなす、わざわざタイトル傍に“小説”と付記された *La Nausée* を垣間見るだけで、その傾向をうかがうに充分である。この問題に就いて、逆の観点から Claude-Edmonde Magny は、そうした価値観の読者サイドへの押しつけに明らかな疑問を抱きつつ、⁶⁾ 又、小説形式に託した彼の存在論の効果を疑いつつ述べている。

l'écrivain qui voudra «prendre parti» sera guetté par la «tricherie» — la mauvaise cette fois, celle qui est essentiellement impuissante à atteindre les valeurs véritables ; et son art, au lieu d'être, comme il le pourrait, une authentique ascèse, ne le mènera qu'à ce qui en est à la fois caricature, contrefaçon et dégradation : à la mythomanie.⁷⁾

哲学に於て扱えられた公約数が文学の場では必ずしもその incarnation に成功しない (caricature に止どまる) 問題は私自身『Sartre と眼差』他で触れたこともあるが、更にこの問題を平易に語るとすれば結局こういうことではないか。哲学を小説の土壌に移植する際に起こる拒否反応がある。あたかも純金を土中深く埋め置いたのちいくら水をやっても金は増えも減りもしない。鉾物を植物の畑に植え変えても無駄である。逆に植物を土中深く埋め置くこと (小説を哲学に演繹する努力) は実りの可能性を残す。

6) *Essai sur les Limites de la Litterature*. Claude-Edmond Magny. Petite Bibliothèque Payot : Les sandales d'Empédocle. P. 157 で次のように述べている。

Mais on est alors en droit de se demander si les procédés littéraires de *La Nausée*, l'agencement, le «découpage» des épisodes, par exemple, parfaitement légitimes tant qu'il ne s'agissait que de produire sur nous une certaine impression, de nous faire adhérer pendant le temps de notre lecture aux expériences d'Antoine, peuvent constituer en même temps, sans autre élaboration, une justification de *La Nausée* en tant qu'expérience phénoménologique nous introduisant à l'Être.

7) *Ibid.*, P. 160

(丁度植物の炭化作用によるように)。故に、文芸作品には批評・評論が付随するが、哲学ではアンチテーゼとしての別な哲学的萌芽が促進され、後者は前者に対抗する形でのみいつも産まれてくるのである。この移植の折りの拒否反応の原因の一つが先程来の観念の露呈化にあるようだが、それは哲学者作家としての *partialité* (偏向) に基づくのではないか。次に我々はサルトルの *partialité* に言及してよよう。

哲学は公約数を求めるものであり、それを論理的思考の援用によって結晶し、ある目的に向って直接、直截的に端数を切り捨てつつ収斂せしめる作業である。かたや、文学の方ではその切り捨てられた一つ一つ(人間一人一人)の単位の世界を宇宙の規模の普遍の世界観にまで敷衍するために(収斂とは逆に)、或る意志と動機と情動に基づいて放射展開する(拡散、分散ではない)作業であると思うが、それではサルトルの *écriture* に影響を及ぼす *partialité* に就いて考えてみよう。それにはサルトル自身の *esthétique* に対する態度から示唆を得ることから始めなければならない。彼の文学観の根底には《真理と美とは絶対に収斂しない》とする命題があり、⁸⁾ それは彼の *moralité* の創造のための *engagement* という目的志向ゆえに「美に対する倫理の優位性に発展しておるのであるが、更にこの先鋒は韻文と散文の関係にも及び Guido Morpurgo-Tagliabue の要約を借用すれば、

He distinguishes a literal language and a poetic language, which to simplify matters he calls respectively prose and poetry. (Mallarmé called them *reportage* and *musique*.) The first is a semantic language—it gives the meaning of things, it is an instrument of the intellect, composed of significant symbols. The second is, one might say,

8) L'Imaginaire, Qu'est-ce que la littérature?, Beaudelaire 等の作品はすべてその命題から出発している。"詩を書く人間は結局非実在の世界, 真実でない世界を創造するが故に, 彼らは無益なものしか与えない。詩は *irréel* という意味で既に《悪》そのものである。"

asemantic: it “presents” things, it does not represent them; it unveils, as do painting and music, the sense of things; their immediate totality, both affective and emotive. (We can think of similar ideas already noted in Valéry...) ⁹⁾ つまり、サルトルにあっては真理の伝達機関としての散文が、言葉を事物性として最大限に発揮させ、言葉自体が芸術的価値実現のための素材となる韻文に対して優位に置かれており、韻文の有つ plaisir esthétique は否定される傾向にある。

Dans la prose, le plaisir esthétique n'est pur que s'il vient pardessus le marché.¹⁰⁾

l'empire des signes, c'est la prose; la poésie est du côté de la peinture, de la sculpture, de la musique ... Les poètes sont des hommes qui refusent d'utiliser le langage. Or, comme c'est dans et par le langage conçu comme une certaine espèce d'instrument que s'opère la recherche de la vérité,¹¹⁾

芸術的価値はむしろ韻文の方に認めながらも、サルトルの価値創造の方向は全く別途にあるが故に彼は必然的に散文への partialité に傾斜せざるをせない。それは畢竟 poésie に対する exclusivité に発展する。こうした exclusivité が彼の écriture に作用しないではおかないだろう。Blanchot, Barthes, Magny 氏らの見解はサルトルの écriture に於ける“文学としての観念の表記の裏側”一影の地帯, 秘密の部分, あいまいな領域—の欠如に就いての指摘であり, 作者の創作の意図のみが肉づけのないスケルトンの如き écriture を生ぜしめているとする批判であるが, それは先に見て来たようにサルトル自身の価値創造の動機に由来する企だてでもあったわけである。

9) SARTRE: Guido Morpurgo-Tagliabue, A collection of critical essays.

Edited by Edith Kern. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J. P. 120

10) Qu'est-ce que la littérature? Gallimard., Qu'est-ce qu'écrire? P. 33

11) Ibid., P. 17

ところで、サルトルの小説技法の研究が、プルースト、カフカ、フォークナー、ヴァレリー、アランに及んでいることは周知の事実であり、その成果は *Les chemins de la liberté* に於いて実験的実現を見ているし、*La Nausée* に於ける日記体の援用などにあらわれている。この並々ならぬ技法研究の成果がかえって *poésie* や *pathétisme* の欠如を生んだのかどうかは置くとしても、では一体 *La Nausée* 以下の作品群にはまったく詩情が無いのかどうかという疑問は残るのである。小説が言語芸術であり *La Nausée* が小説である限り、そこには当然、思考のあや、構成のあや、語法のあや、語のあや（転義法、比喩）は避けられない。そこには自ずから文飾の効果があらわれるはずである。我々は *Le Sursis* に於ける同時性をねらった文体にポエチックなものを感じるのは事実である。しかしそれは他からの借りものの *poésie* であった。その他の *poésie* のありかを我々は求めてみよう。それを私はかろうじてサルトルの *écriture* に象徴されている語のあや（隠喩）に求めたい。¹²⁾ ただし、その *métaphore* のかもし出す抒情性は決して *pastoral*, *rural*, *fabuleux*, *saint*, *féerique* などではなく、むしろそれらの対蹠的な地点にあるものではあるが、*poésie*, *lyrisme* 等の *mots* の *capacité* は *scatologique* なものをも資格所有者として容れてくれるのではないか？ これもまた、*plaisir esthétique* を構成する一要素なのではないか？ という仮定に基づいて、サルトルの *scatologique*, *indécent*, *obscène* かつ *ordurier* な表現の密林に分け入ることにしよう。

〔I〕

——*obscénité* の性格、程度、比較——

12) ただし、そこに抒情性を見出すことが私自身の独断でないことの証言を示しておこう。 *Métamorphose de la littérature*. II. De Proust à Sartre. Edition Alsatia. Pierre de Boisdeffre. P. 259. より

Il y a du lyrisme dans les descriptions sartriennes, une poésie noire, suintante, analogue à celle qui peut naître de la prose d'un Kafka, d'un Joaundeau ou d'un Jean Genêt :

サルトルの *Le Mur* に収まる5つの短編, *La Nausée*, *Les chemins de laliberté* の3つの長編及び彼の劇作等に始めて接する折り, 我々は鄙猥, 猥褻, 尾籠かつ幾分 grotesque とも言えるほどの impression をまず受けはしないだろうか。時としてその強烈な泥沼からは腐臭すら漂よっているように私には感じられたものだ。劇作もまったくそうしたイメージの枠外に逃れ出るものではないが, この露悪的な趣は比較的初期の作品群である小説に於てひときわであるように思う。

その典型として, また出発点として, まずタイトル自体がその趣を内包している *La Nausée* の断面を取り出してみる。

Et quand le chiffon sera tout près de lui, il verra que c'est un quartier de viande pourrie, maculé de poussière, qui se traîne en rampant, en sautillant, un bout de chair torturée qui se roule dans les ruisseaux en projetant par spasmes des jets de sang ... elle verra la chair se bouffir un peu, se crevasser, s'entrouvrir et, au fond de la crevasse, un troisième œil ... Et celui qui se sera endormi dans son bon lit, dans sa douce chambre chaude se réveillera tout nu sur un sol bleuâtre, dans une forêt de verges bruissantes, dressées rouges et blanches vers le ciel comme les cheminées de Jouxte bouville, avec de grosses couilles à demi sorties de terre, velues et bulbeuses, comme des oignons. Et des oiseaux voletteront autour de ces verges et les picoreront de leurs becs et les feront saigner. Du sperme coulera lentement, doucement, de ces blessures, du sperme mêlé de sang, vitreux et tiède avec de petites bulles.¹³⁾

La Nausée に於けるこうした気味悪い, 病的な表現を抜き書きするとすれば, 恐らく *La Nausée* 全体を書き写すことになるだけであろう。この世界の修辭的様相を簡単に説明し, 修飾する形容詞を並べてみると, “ねばねばした, 陰湿な, 胸のむかつく, 生ぬるい, わいせつな, グロテ

13) *La Nausée*: Le livre de poche. P. 222-3

スクな、だりとした、きたならしい、クリーム状の、病的な、やわらかな、厚みのある、甘ったるい、ぬめぬめした肉体のような、生気のない、腐った、受動的な、ゾル状の、ねばりつく、毒気を含む、むんむんした、もうろうとした、精液のような、粘着性のある、静止的な、女性的な、胆汁質の、汚物のような、いんびな、毛むくじやらの、緑色の足を伸ばしつづける植物の、黒くしみ出る、ぶよぶよした、マーマレードのような、軟弱な、陰茎のようにしわのよった、樹液のような、町を食ってしまう植物のような、にごった水溜まりのような、脂ぎって白い太った金髪女のような…”世界がサルトルの世界である。ひわいな表現の伝統は16世紀のラブレールにも求めうるが、ラブレールにはサルトル的な陰湿さや病的なものはない。それはルネッサンス精神を謳歌した巧みな色彩と音響に昇華している。下だり来て、カフカの世界は、もっと乾いた感じを与えている。たわいのないパラドクスを述べれば、La Nauséeを催すのは我々読者の側であるほどのこうした écriture は感覚世界の中でも、音楽的なものというよりむしろ視角的なものであり、我々はダリの絵画の復元をそこに見出すのである。

Le monde de prédilection de Sartre, vers lequel il retourne toujours d'instinct, comme l'Hindou dans les boues du Gange, comme s'il y devait trouver je ne sais quelle purification, c'est l'Enfer—l'enfer des corps, des sécrétions et des muqueuses.¹⁴⁾

Pierre de Boisdeffre はこのように述べ、サルトルの偏愛するひわいな世界をガンジスの泥水をかむる禁欲的宗教的カタルシスへの前提になぞらえている。les obsessions charnelles, le parti-pris scatologique, l'herbier métamorphose¹⁵⁾ 等の意味するところが果して、そうしたカタルシスを味わうための道具であるかどうか。また、道具としてのみの機能をしか持ち合わせぬものなのかどうか。サルトルの小説作品全体をおおうこのよう

14) Métamorphose de la littérature. II, Pierre de Boisdeffre : Ibid., P. 258

15) Ibid., P. 258-261

な不快きわまる、悪臭を放つ mots の群林の意図、由来、効果を追い求めつつ鳥瞰してみよう。

〔Ⅱ〕（意図、動機）

——何故 scatologique な表現が必要か？——

実は、サルトル的実存主義からすればその回答は比較的簡単である。即自存在の露呈化。これ以外にはない。デカルトに於いて延長、カントに於いて noumena（可想的存在）と呼ばれていたものを、L'être transphénoménal de ce qui est pour la conscience est lui-même en soi.¹⁶⁾ つまり、en-soi（即自）、être-en-soi（即自在存）と称したのであるが、その即自の露呈化は La Nausée の重要なテーマであったのだ。

Si l'on m'avait demandé ce que c'était que l'existence, j'aurais répondu de bonne foi que ça n'était rien, tout juste une forme vide qui venait s'ajouter aux choses du dehors, sans rien changer à leur nature. Et puis voilà : tout d'un coup, c'était là, c'était clair comme le jour : l'existence s'était soudain dévoilée. Elle avait perdu son allure inoffensive de catégorie abstraite : c'était la pâte même des choses, cette racine était pétrie dans de l'existence. Ou plutôt la racine, les grilles du jardin, le banc, le gazon rare de la pelouse, tout ça était évanoui ; la diversité des choses, leur individualité n'était qu'une apparence, nu vernis. Ce vernis avait fondu, il restait des masses monstrueuses et molles, en désordre—nues, d'une effrayante et obscène nudité,¹⁷⁾

普段我々の眼にそれとして映る物質的現象はうるしやニスをぬられた状態でしか認識されていない。そうした容体をおおうニスをはがし（意味的なものを排除する——現象学的還元操作）、ヴェールを取り去る作業の後に現われ出るもの（一皮むいたもの）は être-en-soi という気味悪い、

16) L'être et le néant : J.-P. Sartre, Gallimard. P. 29

17) La Nausée : J.-P. Sartre. Le livre de poche. P. 180

obscène な存在なのだ。従って, masses monstrueuses, molles, nues, effrayante, obscène nudité 等の scatologique な mots は en-soi を無気味なものとして印象づけるために効果的に配され, fioriture de style に貢献しているのであり, en-soi の明瞭かつ露呈化操作の一翼を充分になっている。カフカは一般的な認識のうちにあるものが実は仮象にすぎぬ事実を表わすために非現実の世界を描いたが, サルトルはその仮象の剝奪作業に exagération とも思える écriture scatologique を用いたと思われる。

かくして殊更に彼が汚ならしく表現する対象はすべて即自乃至即自存在についてであるが, 一方で pour-soi (対自≡精神) であると同時に en-soi (即自≡肉体) である二元的存在として人間もやはりその対象になるわけである。サルトルは人間の有つこの形而下的 matérialité としての corps 具有の宿命には我慢出来ないかの如く, 特に厳しく scatologie が展開される場合は対象, 容体として措定された肉体に関してである。

Mais ma mort même eût été de trop. De trop, mon cadavre, mon sang sur ces cailloux, entre ces plantes, au fond de ce jardin souriant. Et la chair rongée eût été de trop dans la terre qui l'eût reçue et mes os, enfin, nettoyés, écorcés, propres et nets comme des dents eussent encore été de trop : j'étais de trop pour l'éternité.¹⁸⁾

このように, サルトルの肉体嫌悪は, 受肉をのろい, 肉体の消滅を願うほど強烈なものである。ゆえに corps の所有者としての自分自身についてはそれが morbid (病的な) かつ pathologique (病理学的な) monomanie (偏執狂) の状態にまで亢進せられ, その monomanie がサルトルに対する強迫観念となっているようだ。そして彼の強迫観念に刺戟されつつ膨張してゆく “dévoiler” の作業は esthétique なもの＝想像力のお蔭を蒙っている対象物＝想像力の世界においてのみ真価を発揮出来, その本質的構造のうち現実世界の空無化を含むものに向って前進する。つまり, 世界内のあらゆる美的価値の崩壊を彼にせまるのであり, 従ってその矛先は人間

18) Ibid., P. 182

のうちでもよりニスにおおわれている存在であるところの女性には一層激しく、深くくいこむように思われる。何故なら、その上更に

Pour le reste, l'objet en image est un irréel ... Ils ne sont ni lourds, ni pressants, ni astreignants : ils sont pure passivité, ils attendent.¹⁹⁾

女性にはサルトルの嫌う passivité が有ることも理由の一つになる。Érostrate の主人公は娼婦をピストルで脅迫しつつサディズム的な態度で女性蔑視を表明する。

Je la repoussai.—Désabille-toi, lui dis-je ... Elle fit tomber son pantalon à ses pieds puis le ramassa et le posa soigneusement sur sa robe avec son soutien-gorge ... —Mais qu'est-ce que tu veux que je te fasse ?—Rien. Marche, promène-toi, je ne t'en demande plus.

Elle se mit à marcher de long en large, d'un air gauche. Rien n'embête plus les femmes que de marcher quand elles sont nues ... —Assieds-toi. Elle s'assit sur le lit, et nous nous regardâmes en silence ... Tout à coup je lui dis : —Écarte les jambes. Elle hésita un quart de seconde, puis elle obéit. Je regardai entre ses jambes et je reniflai ... Alors j'ai sorti mon revolver et je le lui ai montré ... Elle a laissé tomber son pantalon sans rien dire.—Marche, lui dis-je, promène-toi. Elle s'est promenée encore cinq minutes. Puis je lui ai donné ma canne et je lui ai fait faire l'exercice. Quand j'ai senti que mon caleçon était mouillé, je me suis levé ...²⁰⁾

また、L'enfance d'un chef の主人公 Lucien の場合は

il prit l'habitude de regarder par les trous de serrure ... Il vit sa mère pendant qu'elle se lavait. Elle était assise sur le bidet ... elle pensait que personne ne la voyait. L'éponge allait et venait toute seule sur cette chair abandonnée ... Maman frotta une lavette avec un

19) L'imaginaire: J.-P. Sartre. Gallimard. P. 162

20) Le mur : J.-P. Sartre, Collection folio, Gallimard. Érostrate. P. 85-7

morceau de savon, et sa main disparut entre ses jambes ... Mais pendant ce temps-là, elle était cette grosse masse rose, ce corps volumineux qui s'affalait sur la faïence du bidet.²¹⁾ ビデにまたがる母の肉体から即自存在の醜怪な様相への啓示を受けている。多分にフロイトの心理学に啓発された趣を含む²²⁾ こうした条りは、サルトル自身の幼児期に経験した²³⁾ complexe d'Œdipe (エディプス・コンプレックス) の裏返し、反動として féminin, maternel なものへの攻撃的な様相をすら帯びつつ en-soi の露呈化作業に資するところ大である。また、La Nausée のホテルのお内義の描写、La Chambre の女主人公 Ève の描写、とりわけ Le Diable et Le Bon Dieu の女主人の一人 Catherine は、Je veux être ton bordel!²⁴⁾ と bordel (売春宿・淫売屋) に成り果て、あと一人 Hilda の如きは、

Moi qui répugne à toucher du doigt le fumier, comment puis-je désirer tenir dans mes bras le sac d'excréments lui-même ?²⁵⁾

fumier (堆肥), sac d'excrément (糞袋) で形容されるまでに貶められている。糞便論的記述の効果はヴェールにおおわれた女性存在の醜怪さをあばくため、最大限にその効果を発揮し、女性存在はその格好な餌食である。事物の多様性、個性としての上塗り(仮象)をはがすにこれ以上効果的な方法はないのだ。このように、écriture scatogique が即自の現前化に意図されていることは、結果的にみてもほぼ間違いない。

しかし、我々はそれでも何故そこまで激越な accent が必要なのか、ま

21) Ibid. L'enfance d'un chef. P. 174-5

22) L'enfance d'un chef の肛門性欲症の描写はフロイトに起因しているように思える。猶ほ、フロイトに関するサルトルの見解は L'être et le néant の La Psychanalyse existentielle に詳しい。

23) 主として斜視、父の居ないこと、再婚によって母を奪われたこと等、Les mots に詳しい。

24) Le Diable et Le Bon Dieu : J.-P. Sartre. Le livre de poche. P. 81

25) Ibid., P. 216

たは何故表現の *exagération* が湧出するののかという疑問から逃れられない。事実或るカトリック作家（残念乍ら名前を覚えていない）は“サルトルはことさらに汚ない表現をつかって人間の尊厳性を貶しめることに尽力している”と語ったことがある。彼の哲学的動機に起因するが故の *scatologie* であることをふまえた上でなおその行き過ぎを感じざるをえない。

Nos cauchemars sont remplis de ces craintes. Baudelaire et Mallarmé les ont traduites par l'image du navire ou du cygne prisonniers éternels des glaces. Poe, avant eux, a décrit l'horreur de l'étang au fond duquel, avec ses habitants, la maison Usher s'engouffre.²⁶⁾

Georges Poulet はサルトルの奇怪な、醜悪な語のあやを Baudelaire, Mallarmé, Poe 等の *navire, cigne, étang* のイメージと同一地平に置いているが、サルトルはそうした *Imaginaire* による *analogon*²⁷⁾（類同代理物）を拒否する立場にあるし、²⁸⁾ 彼らの柔和な美的 *image* をはるかに圧倒し尽すサルトルの *scatologie* は本来小説中では手段として駆使されるべきものであるのに、*scatologie* 自体が既に目的に変容せしめられているかの如くに異常性を感じしめる。その疑惑に足を踏み入れてみよう。

〔Ⅲ〕 (*scatologie, obscénité* の母体)

——感性的人間としてのサルトル——

意図、動機を凌駕、逸脱したかに思える彼の即自の鄙猥に過ぐる描写は、

26) *Les critiques de notre temps et SARTRE*, Édition Garnier. Georges Poulet [Le Cogito sartrien], P. 41

27) *L'Imaginaire* の最終部分において、サルトルは、芸術作品はすべて *analogon* の所産であるが故に非実体的なものであり、審美的観想は空無化作用 (*néantisation*) を呼び起すに止どまるとする。

28) *L'Imaginaire* 以外にも、*L'être et le néant* でも関連した記事はある。P. 661 Si l'être est une totalité, il n'est pas conceivable en effet qu'il puisse exister des rapports élémentaires de symbolisation (*fèces=or, pelote à épingles=sein, etc*), qui gardent une signification constante en chaque cas, c'est-à-dire qui demeurent inaltérés lorsqu'on passe d'un ensemble signifiant à un autre ensemble.

サルトルの libido の奔流を感じさせると同時に、窮地に追い込まれた者が切羽詰った果てに身を捨てる覚悟で抵抗しているといった姿をも思わせる。obscénité に対する飽くなき monomanie, viscosité に対する脅迫的幻覚性、などの異常性をサルトルに触発せしめたもの、単俗な表現描写を彼に強いるような窮地に追いやったものは何であったのか。その原因のいくつかを探ってみよう。

既に見て来たように、デカルトにあっては延長、カントにあって noumena (可想的存在) であったものが en-soi なのだが、デカルト、カントに於てそうした存在が殊更醜怪なものを意味していたという記事にはお目にかからない。デカルトはみじんのゆらぎも感じさせぬ不動の確信に満ちている。カントは、人間は現象的存在 (phenomena) 界に安住しうるものであり、またそうであるが故に自然法則は現象的存在界に妥当する、またするはずだと考えていたから、可想的存在 (noumena) が現象的存在の世界にはみだして世界の秩序を崩すなどという不安は抱かなかった。しかし、サルトルに於てはこの noumena が意味の外皮をはがれ、軟らかく無定形なこね粉、ねり粉、醜悪で淫猥なものとして phenomena の上に出出している。それは人間の根源的な不安に訴える代物である。デカルト、カントにあっては何ら不安の対象でなかった同じ代物がサルトルでは異常な恐怖をよびます不安の対象に成っているのはなぜか。

そこに我々は (弁証法を駆使し、明晰な論理を構築し、なにごとすべて総合をもってゆきたがるという意味合いを含めての、²⁹⁾ 冷徹な理性の人としての) ヘーゲルの体質の他に、(苦悩が先行し、不安がその人間を根源的にとらえる感性の人としての) キルケゴールの体質をも見出す。糞便論的な記述の意図は既にサルトルの実存主義理論から、了解済みであるが、その記述の excessif な accent については、感情を備えた人間サルトルの面から捉えてみよう。“われわれの人生の実践面においては、決定的な科学的解決に待たなければならないことなど、きわめてまれにしか

29) Simone de Beauvoir の La force de l'âge (女ざかり) より。

い。”³⁰⁾と語ったのは、キルケゴールの系譜に属し、恐れと恐怖の深淵から独自の、実存主義的な宗教観を明らかにしたスペインの思想家 Miguel de Unamuno y Jugo であった。また、Robert G. Olson は“とにかく、人間が正確に言って、理性的動物として定義されることができないにしても、此処と今の不安を体験するのは、単に理性的動物としての人間なのではない。空間と時間の限界を自覚することによって苦悩するのは、感情的存在としての人間である。³¹⁾”と語っているが、サルトルをしてあの異常な、脅迫的な、また人間を侵食する即自存在への偏執的、病的観念に至らしめた正体を“不安”に求めて、その仮定から進んでみよう。

C'est précisément la conscience d'être son propre avenir sur le monde du n'être-pas que nous nommerons l'angoisse.³²⁾ あらぬという仕方で自己自身の将来であるという意識が不安であるとするサルトルの不安の概念は pour-soi と en-soi の拮抗作用の過程で必然的に生じる現象であり、その不安から逃れる方法は、toujours prêts d'ailleurs à nous réfugier dans la croyance au déterminisme si cette liberté nous pèse ou si nous avons besoin d'une excuse. Ainsi, fuyons nous l'angoisse en attendant de nous saisir du dehors comme autrui ou comme une chose.³³⁾ 我々自体を事物（即自）として把えることである。しかし、その方法は人間をして la mauvaise foi³⁴⁾ たらしめることをも意味するのである。従って即自を嫌悪するサルトルの体質はいやおうなく“不安”の領域に自分を追いやる体質なのだ。そうした体質の形成に与かる見逃すことの出来ぬサルトルの生理的体質にも触れてみよう。

30) La agonía del cristianismo: Miguel de Unamuno y Jugo. 『キリスト教の苦悶』叢書, ウニベルシタス。法政大学出版局, 神吉敬三, 佐々木孝訳 P. 4

31) An introduction to existentialisme. Robert G. Olson. 成川武夫訳, 紀伊国屋書店。P. 77

32) L'être et le néant., Ibid. P. 69

33) Ibid., P. 81

34) Ibid., P. 82

“彼は葉緑素アレルギーで、牧草の緑がたまらなかつた。”³⁵⁾ Simone de Beauvoir の証言を裏づけるその他の例証には、ことかかないのである。

L'herbier métaphorique de Sartre ne comporte que des plantes vé-néreuses, son bestiaire, que des bêtes puantes (le cloporte, le cancrelat, la mouche, les crustacés, la limace, choisi pour exprimer le côté rampant, gluant d'une nature hostile.)³⁶⁾

Boisdeffre の記述するサルトルの植物、わらじむし、あぶらむし、なめくじ、甲殻類（とくにカニ）に対する極端な嫌悪感が幻覚性精神症の域に達していた時代のあったことも Beauvoir は証言している。夢、覚醒時幻覚、知覚幻覚に興味をもち、またアンリ、ミシーを真似たのであろうが、メスカリン注射を打ったりもしており、その後遺症は慢性の幻覚性精神症となり La Nausée にあらわれる気味の悪い世界がサルトルにつきまとったこともあったようだ。³⁷⁾ ポーボワールの表現しているものから推すとそれはやはりダリの絵画を彷彿させる。また、「サルトルが（性的）倒錯の問題に取り憑かれたのは、既にラ・ロシエルではじまっている」³⁸⁾ という証言もある。

葉緑素アレルギー、ざり蟹等の甲殻類への悪感を伴う恐怖、慢性幻覚性精神症、性倒錯への異常な執着、こうしたものが、La Nausée の世界で大きく、薄気味悪い花を開かせたか、少くともその要因としてあったことは否定出来ない。

Si on s'aventure trop loin, on rencontre le cercle de la Végétation. La Végétation a rampé pendant des kilomètres vers les villes ... la Végétation l'envahira, elle grimpera sur les pierres, elle les enserrera,

35) La force de L'age: Simone de Beauvoir. 朝吹登水子, 二宮フササ, 紀伊国屋書店。P. 11

36) Métamorphose de la littérature: Pierre de Boisdeffre., Ibid. P. 261

37) Beauvoir の回想録。La force de l'age より。

38) Peter Dempsey 博士の証言、『サルトルの世界』堂庭一郎訳, モリス・クランストン, 清水弘文堂刊, P. 7-8

les fouillera, les fera éclater de ses longues pinces noires... Des plantes châtrées, domestiquées, inoffensives tant qu'elles sont grasses. Elles ont d'énormes feuilles blanchâtres qui pendent comme des oreilles.³⁹⁾ 一葉緑素アレルギー。《Les grands crabes tapis sous le manteau de brume》⁴⁰⁾, 《Barataud est une punaise》⁴¹⁾ ——蟹, 南京むし, こうもり等への恐怖感。Berliac le regarda avec profondeur et lui dit: 《Je m'en doutais: tu es un anal》⁴²⁾ Bergère se souleva un peu et passa une main sous les reins de Lucien; l'autre main ne caressait plus, elle tirillait. 《Tu as de belles petites fesses》, dit soudain Bergère. Lucien croyait faire un cauchemar: 《Elles vous plaisent?》 demanda-t-il avec coquetterie.⁴³⁾ ——肛門性慾的倒錯。このように、彼自身の有つ生来の体質が、彼の文芸作品上にはほぼ全般的に行き渡っているのである。従って、こうした exagération とも思える écriture scatologique et obscène は、単に、ガンジス川に入りて泥水をかむることによって purification を、カタルシスを味わおうとする動機を凌駕し、⁴⁴⁾ 意図、動機以前に由来するサルトルの根源的な宿命性に起因しているように思われる。彼のものする文芸作品がおのおのそうした populaire な雰囲気に含まれている所以ではなかろうか。更に popularité に偏する彼の態度は自然に民衆レベルへの自己投下を意味しており、彼の生来の繊細さも手伝って“人類への愛”の如きものも感じさせるのではないか。カント、デカルトにあっては何ら感性に訴えることのなかった即自に異常な恐怖を覚えるサルトルの体質は、確しかに“苦悶”から出発したキルケゴールの体質に比較しうるものであると思う。

39) La Nausée., Ibid. P. 218-9

40) Le Mur., Ibid. P. 189

41) Ibid., P. 171

42) Ibid., P. 191

43) Ibid., P. 207

44) 註 14) を参照。

とるで、サルトルはその不安に就いて、

Il faut donner raison d'abord à Kiekegaard : l'angoisse se distingue de la peur par ceci que la peur est pour des êtres du monde et que l'angoisse est angoisse devant moi. Le vertige est angoisse dans la mesure où je redoute non de tomber dans le précipice mais de m'y jeter. ... Pareillement le mobilisé qui rejoint son dépôt au commencement de la guerre peut, en certains cas, avoir peur de la mort ; mais, beaucoup plus souvent, il a « peur d'avoir peur », c'est-à-dire qu'il s'angoisse devant lui-même.⁴⁵⁾ 自分が断崖に落ちはしないかと恐れるかぎりにおいてではなく、自分が自から身を投げはしないかと恐れる場合が“不安”であり、戦争に赴むく応召軍人は死の恐怖をもつこともあるが、むしろ《恐怖をもつことについて恐怖をもつ》場合の方が多く、それが“不安”であると言う。

しかし、この理論的に展開された不安は、概念操作による概念規定の域を出ないものではないだろうか。我々はやはり、断崖に落ちはしないかと恐れるときの方が不安であるし、戦争に行つて死ぬのではないかと恐怖を感じる時が生身の人間の、それこそ今と此処の不安であると考えの方が妥当であるように思う。彼のように自己についての反省的把握を不安と称することには疑問がある。むしろ、不安は現在自己の居る一步前の段階に対して未来志向的に感じられるはずのものである。そこでサルトルの La Nausée 時代の時代背景に目を移し、“不安”の直接の契機、発火点に成ったものを探ってみることにする。なぜなら、“不安”は彼自身の体質と時代性 (situation) が融和する土壤に於て倍化したと考えられるからだ。

〔IV〕 (La Nausée を育くんだ時代)

——Céline の全的な影響——

第一次世界大戦は、従来のヨーロッパ的な、キルケゴール的な、パスカ

45) L'être et le néant. Ibid., P. 66

ル的な不安の概念を少くとも変容乃至実体化したはずである。自我の病い、ヒステリー、ヒポコンドリー等がそれでもやはりキリスト教的不安の領域に止どまるものであったのに反して、我々の時代には神に代わる、更に絶対的、直截的な支配者が“全面戦争による確実な死”という相貌で現われて来たからだ。ところで、

《C'est un garçon sans importance collective, c'est tout juste un individu.》 L.-F. Céline.⁴⁶⁾

これは La Nausée のエピグラフである。文章は Céline (セリーヌ) の Voyage au bout de la nuit (夜の果ての旅) の一節だ。彼は1932年にこのセリーヌの作品を読んでいる。⁴⁷⁾ それは発売されるやたちまち五万部を売りつくすという爆発的な反響を呼び起こす一方、ことさらに人間の醜悪な領域をとりあげすぎること非難を浴びたという。いわゆる俗語を縦横に駆使することで、隠喩的表現効果による抒情性を生ぜしめたセリーヌの描いた世界は憎悪、絶望、精神的墮落等の地獄の様相を彷彿させるに充分であったが、汚物と膿と不潔なありとあらゆるものをきわめてひわいに描写したセリーヌの écriture が、サルトルの La Nausée に決定的な影響を与えたことはほぼ想像出来るように思う。

〔Ⅱ〕に於て見て来た La Nausée のサルトルのテーマとモチーフは、“現代世界の恥辱的な真実を、民衆の言葉で叫ぶ”意味で、François Rabelais の流れを引くといわれるセリーヌの Voyage au bout de la nuit のモチーフ、テーマにぴったり重なる。国家、愛、正義、戦争、イデー等の既成理念が微塵にくだけ散る地獄絵的展開の中で、純粋個人への夢を絶ちきれぬ人間存在が絶望と墮落の奈落へと失墜してゆくこのドラマの経緯は既にそれだけでも La Nausée 的世界構築に十分な材料を与えているが、

46) La Nausée の épigraphe が Céline の文章であることからして、サルトルが Céline によほどの共鳴を覚えたことは疑いない。

47) Les Écrits de Sartre. Chronologie, bibliographie commentée: Michel Contat. Michel Rybalka. Gallimard. P. 25

に止どまらず更に、argot や langue populaire の豊饒さゆえに、仏語史の上からも俗語の体系的導入の面で特異であるといわれるセリーヌの文体が、これもまた La Nausée の醜悪さに大きく貢献したであろうことはほぼ間違いでない。或る意味では、彼の告白にあるプルーストやカフカ以上に濃厚な影響を与えたのはセリーヌではなからうか。

その理由として考えられる原因の一つは、彼ら両者はほぼ同一世代人であり、つまりは Situation、立っている地盤を共有しているのである。殊に、こういうことを考えたい：文体というものは近い世代間では特に相互伝達性、又相互的模倣性が発揮され易いはずだ。現代作家がラブレールの文体でものを書くとはいえられない。更にこの両者に共通したものが“不安”という形でおおいかぶさっている。

P. 35, 36 で見たところのセリーヌの世界の根底にあるのは人間不信と、そこから派生する絶望をはるかに超えたニヒリズムである。そしてこの両者に共通な“気分”がニヒリズムに由来すると思われる。その気分とは第一次世界大戦と第二次世界大戦の谷間に壊成されたものに他ならない。20世紀に於ける戦争は従来（一般市民に関知するところのものではありえなかった）局地戦ではなくて、いわゆる総力戦とも称すべきものであり、老若男女を問わず無差別に世界内人類全体に犠牲を強いるものとなった。こうした状況は不安を凌駕し、恐怖を現前せしめるほどのものである。文学者もその枠外にのがれることは不可能であり、文学者をして政治、経済への関心、たずさわりを余儀なくさせる結果を産む。つまり、社会性を帯びた文学者の産出の素地は“不安”に起因するのである。

しかし、作家が社会性や世界内存在としての連帯性を義務と感じ目覚める一歩前の段階を考へてみなければならない。それは食うか食われるか——あるがままの世界を甘受するか、少しでも変革しようと試みるかをいやおうなく迫られる直前迄の状態を意味する。その一歩前の段階とは、いわば次に来るべき時代とそれまでどっぷり首まで漬かっていた、どちらかといえば安住していた、または安住を願っていた時代との裂目の時代であ

り、極度の不安と精神錯乱を助長する時代であるはずだ。旧来的なあらゆる意味や価値観の崩壊と、未来志向的な新しい価値創造意欲との谷間が、*La Nausée*, *Voyage au bout de la nuit* を生み出す母体であった。nihilisme をこうしたどうしようもないほどの限界状況的気分のあとにつづく一種の“ひらき直り”であるとすると、ひらき直る直前迄は耐え難い“苦悶”と“不安”があったはずだ。大戦争のあとに戦争文学の台頭することは歴史の証明するところだが（バルビュス、デュアメル、ドルジュレス等）、1918年の終戦は戦争による破壊とよりどころを失った人間精神の頽廃を残した。精神的破壊の気分は不安と精神錯乱を呼びおこし、dadaïsme が、次いで surréalisme が誕生するのであるが、これらもまた“不安の文学”なのである。ファシズムの進出、スペイン内乱⁴⁸⁾、人民戦線の活発化などがヨーロッパ全体を暗くおおい、加えて第二次世界大戦の戦雲のたちこめ始めていた時代の“気分”の中で *Voyage au bout delanuit*, *La Nausée* は生まれたのであり、それはそれで決定的な性格を夫々の作品にもたらしたわけである。その意味ではこれら2作品は旺盛な時代精神の産物ともいえるであろう。更に、サルトルの初期の小説作品は少からず第二次世界大戦前の“不安の文学”の領域に属しているとも言える。そして、彼の *écriture scatologique et obscène* はそのことを明瞭に物語っているとも言えそうである。

〈結 び〉

要約すると、《糞便論的記述》はねらいとしては en-soi の露呈化にあった。そしてそれは効果的成功を収めた。しかし、その効果を凌駕する汚ならしさが残るのは、多分に、彼の感性的人間としてのサルトルの体質に由来する一種のリビドーのなせるわざであった。又、そのリビドーを助長するに与かって力のあったのは彼の生きた時代の精神であり、又、その時代精神の産んだ異端児セリーヌの文体がサルトルの文体に決定的な刺戟を与

48) *Le Mur* の舞台となった。

えた。こうした諸々の要素が絡み合った場所にサルトルの糞便論的抒情性が育ったのである。

《糞便論的記述》の決定因子の一つを“不安”に置いたことに、更に一つだけつけ加えたい。サルトル的実存主義の存在論では、不安は自由志向性、自由そのものとして定義される一方その négatif な意味に就いて示唆するところは manque (欠如) であり、欠如は欲望の源泉又は欲望そのものなのである。卑俗なたとえを引用すれば、manque は“穴” (trou), 埋められるべき穴なのだ。

Or, en lui-même, le trou est le symbole d'un mode d'être ... On voit tout de suite, cependant, il se présente originellement comme un néant «à combler» avec ma propre chair ... Ainsi, boucher le trou, c'est originellement faire le sacrifice de mon corps pour que la plénitude d'être existe, c'est-à-dire subir la passion du Pour-soi pour façonner, rarifier et sauver la totalité de l'En-soi ... une bonne partie de notre vie se passe à boucher les trous, à remplir les vides, à réaliser et à fonder symboliquement le plein.⁴⁹⁾ 穴は manque, vide であり、それを埋める行為は空虚を満たし、充実を実現することなのだ。従って穴は埋められることを呼び求めるという意味に於ては、満たされなければならぬ complexe の象徴なのである。l'obscénité du sexe féminin est celle de toute chose béante : c'est un appel d'être, comme d'ailleurs tous les trous ; en soi la femme appelle une chair étrangère qui doit la transformer en plénitude d'être par pénétration et dilution. Et inversement la femme sent sa condition comme un appel, précisément parce qu'elle est «trouée». C'est la véritable origine du complexe adlérien.⁵⁰⁾ 従って穴＝空虚＝manque＝complexe＝満たされることを欲するものなのだ。埋められない、欲しても得られない、つまり、即自の反対側の世界が

49) L'être et le néant., Ibid., P. 705

50) Ibid., P. 706

“不安の領域”である。逆に言えば、穴や空虚を埋め尽さぬ状態が不安を意味する。そうした土壌では“不安”に由来する精神錯乱が本能への下降を促がすリビドーの活発化に寄与する。そのリビドーは意識的な表現に向かうこともあるが、多くの場合は盲目的に、無政府主義的に己れを表現するものではないか。その盲目的な欲求は必然的に即自（可感的世界）の方へと下降してゆくのではないか。その下降した地表は、支離滅裂な幻覚症状の世界、カフカやセリーヌの非現実の、また汚濁に満ちた世界、またはダンテの地獄やファウストのワルプルギスの夜の如き世界として現前するのではないか。こうした推測をふまえたものであることを付記しておく。

サルトルの世界は実に龐大である。広くかつまた深い。その中でもこの小論で扱った部分は négatif な面である。彼には、固くて、きびしくて、金属的で、数学的で、非情、男性、厳然、完全性、均衡、平静などに象徴される硬質なものを求める、いわばプラトンの〈イデア〉への憧憬と並行して、クリーム状の、やわらかな、ねりこのような、女性的な、植物的な、彼の“即自”に象徴される、プラトン流には〈可感的世界〉から逃れられぬという諦観があるかに見受けられる。そして、プラトンが、可知的世界から可感的世界へ移行することは“墮落”を意味すると考えたように。サルトルもまた即自に止どまることは Salaud に成ることだと考える。彼は抒情性や美的感覚などの esthétique な世界への埋没を即自の側に置いている。スーパーロマンへの彼の態度はそこから来ている。しかし“実存の世界”は可感的世界なのだ、或いは可感的世界から始まるといいかえてもよいだろう。故にサルトルはその世界（ポー、マラルメ、ボードレールの側の世界）から飛翔した。彼の小説的世界、劇作の世界はゆえにこの可感世界（感情世界）の描写である。飛翔するサルトルは〈神〉に代わる倫理を求めて舞い上ったギリシャ神話の Icare を思わせる。しかし、サルトルは Icare よりも賢明である。Icare は太陽のみを目指して高く上りつづける愚か者であったが、サルトルは常に地表（可世感界、即自世界）を眺め

つつ遊泳する。彼に綜合のくせが有ることは先にも見たが、彼は可感的世界と可知的世界の融和をねらっているようだ。丁度、アウグスティヌスが“本質の世界”（可知的世界——善、美、正義）と神との融和を試みたように。通史的に見ると、プラトン、アウグスティヌスの可知的世界乃至その神との融合世界は、エラスムス、ラブレー、ニーチエを通過し、一方ではルソーに起源を発する浪漫主義からダダ、シュールに至って可感的世界に移行したと見ることが出来る。サルトルの意向はそれらの経緯をふまえた上で vertical な面と horizontal な面を綜合するつものようである。彼が全的世界の把握を目指し全人的な把握を試みる人と称される所以である。ヘーゲリアンであり乍らもキルケゴール的の素質を有する人にも可能な試みでもあろう。それだけに、芸術を否定する意志と芸術を愛する衝動の自家撞着にもっとも深くおち入っている現代哲学者の典型という姿を我々に見せてくれているのであり、実存主義的ジャンセニストと称される所以である。

以上